

文学部

文学部生のリアルな学生生活

Vol.38

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

本の先には知らない誰かの時間がある

文学部人文社会科学科英語文学文化専攻3年
愛知県立豊橋東高等学校出身

すぎもと
まいこ
杉本 麻郁子

文学部生が何を学んでいるのか、端から見たら少しもはつきりしないことだろうと思う。

私は文学部にある13専攻のうち英語文学文化専攻の学生で、英語を勉強して海外文学を読んでいると言えば、まあおおむねそうである。しかし、ここでの学びが3年目ともなると、文学部の本質は別にあるということを確認している。それがわかったことに安堵し、誇らしくなり、笑みさえこぼれるほどだ。

3年次になって司書・司書教諭課程の履修を始めた私は、スチューデント・ライブラリアンという活動に参加することを決めた。中央大学の学生がボランティアで中央大学杉並高校を訪問し、生徒とともに学校図書館の活性化を図ろうという取り組みだ。現在は、図書館までのルートや図書館内のフロアマップ、おすすめの本の紹介など、いくつかの短い動画を作り、生徒みんなに見てもらおうと作業を進めている。

私がこの活動に参加しようと思ったのは、学校図書館での司書の仕事を体験したかったのはもちろんのこと、自分より年下の世代の人々が日常的にどんなことを考えて生活しているのかを知りたかったからでもある。自分が高校生だったころのことを思い返すだけではわからない、今の時代の高校生の考えごとを肌で感じたことがあるかどうかで、今後の自分の社会へ接する姿勢が変わってくる気がしたのだ。

実際に高校生と話してみると、さまざまに感じ方や考え方に触れることができる。杉並高校の生徒は課題図書として3年間で100冊の本を読むそうだが、そのことを教養と捉えて意欲的な生徒もいれば、娯楽として気楽に読んでいるような生徒もいた。中には読んでいないという生徒もいて、そのことに「もったいない」という考えを示す生徒、「そういうものだ」という反応を示す生徒もいるなど、それぞれの考え方や人との関わり方の違いを感じた。このよう

に、そのときそこで生活している人の考えに触れながら、彼らが利用する図書館という場を作る取り組みは、私にとって貴重な経験となっている。

もう一つ、今私の頭の大半を占めている考えことは、授業で制作している本のことだ。文学部の教育方向上事業で設けられた実践的教養演習という授業では、インターシップのような実践的な活動を通して学びを得ることができる。出版・イベント・動画制作の3部門に分かれており、私はその出版部門で、自分たちの作りたい本を出版しようと奔走している。

高校生向けに、大学での学びがどんなものなのかをつかんでもらうというコンセプトで、テーマは「時間・記憶・記録」。文学部13専攻と学びのパスポートプログラムから各1名、理工学部から2名の先生方について、論考をいただき、私たちが編集をする。執筆依頼をしたり構成や装丁を



コーヒー同好会に入っています





普段はこんな本を読みます



友人たちと学食を食べました

練ったり、自らの手で校正を行ったりと、どの段階にも苦労はあるのだが、私たちが最も頭を悩ませたのは、誰に向けたどのような本にするかという方向性を決める初めの段階だったと思う。

当たり前のことだが、出版した本を手取る人は、私たちが具体的にイメージできる誰かではない。読者は自分の観測できる範囲にいない不特定多数で、相手は忙しく生きている人かもしれないし、本を読むのにじっくり時間をかける人かもしれない。何年も後になって読む人かもしれない。この本の内容が、どうしたらその人の心の中に染み入るかを考えたとき、「時間・記憶・記録」がテーマということもあり、自分と違う時間軸を生きる人のことを強く意識するようになった。そして、本のどこか一部分でも、一人ひとりの読者にピンとくるものがあるという考えが生まれ、それが身近な例を用いた原稿の依頼や、先生方の原稿をさらに日常的な感覚と結び付ける学生コラムの執筆へとつな

がった。

スチューデント・ライブラリアンと本の出版、どちらの活動をするにあたって、も根底にある人や人間社会に対する目線やそれに向かう姿勢は、文学部で学ぶうちに私の基盤となってきたものだ。

文学部人文社会学科の私は、本を読んだり映画を見たりする授業の中で、人々が人間をどのように理解してきたかを読み取ったり、私たちが個人のレベルで日々体感していることや単に自分と人との関係でわかっていることが、人間社会にどのような持ち込まれているかを考えたりする。文学部生が大学生活を通して身につけようとしていることは、そういった人間に対する理解力や文学を学ぶ者としての基本的な姿勢、教養だと思う。このような文学部の学びをもって、自分や同じ文学部の友人たちが社会と接していることに私は安心するし、その精神でこの先を続けていこうと思える。

文学部だより

ご挨拶

文学部事務室 **無田 絢香**

ご父母の皆さま初めまして。2021年7月1日付で文学部事務室に配属になりました、無田絢香と申します。

私自身、附属の高校も合わせ7年間を中央大学で過ごし、親身に質問や相談を聞いてくださる先生方や手厚い学修支援制度のおかげで、充実した学生生活を送ってまいりました。

大学での4年間をどのように過ごすかは十人十色です。ゼミの活動に励んだり、語学の学修に励んだり、部活やサークル活動に励んだり、旅行をたくさんしたり。あれもしたい、これもしたいとぜひ積極的に挑戦してもらいたいと思います。

一方でコロナ禍という時世の中、留学など行動が制限されたり、対面授業が制限されたりと、学生生活がなかなか思うようにいかないと感じることもあるかもしれません。

しかし、オンライン授業が増えたことにより、海外で活躍する先生の講義が聞けたり、時間に制約されないため、

各分野の最前線で活躍する実務家を講師にお招きすることが可能になったりと、対面授業では実現困難な授業が展開されるきっかけになったことも事実です。

また、通学時間がなくなり自由に使える時間が増えたことで、それを資格取得の勉強時間にあてたり、趣味をする時間にあてたりと、有意義に過ごすことも可能となりました。

まだまだ気の抜けない状況ではありますが、今できることはいろいろとあると思います。悩んだり困ったりしたときはどうか一人で抱え込まずに、文学部事務室、教員、共同研究室をいつでも頼るよう、ご子女に利用を勧めさせていただきたく存じます。文学部はクラス担任制やゼミ、共同研究室に代表されるきめ細やかな教育が特徴であり、学生一人ひとりへの支援も大切にしています。

末筆になりますが、ご子女の学生生活がより充実したものとなりますよう、精一杯サポートさせていただきます。どうぞよろしくご申し上げます。

